



会議レポート

ILC2012

ILC2012

ILC2012 が 2012 年 10 月 21 日～24 日にかけて、京都みやこめっせで開催された。日本で初めての ILC となる今大会の記録を、不肖ながら、General Chair を務めた筆者が報告する。

ILC と言っても要領を得ない読者が多かるう。International Lisp Conference の頭文字を取って ILC である。ILC の歴史は古く、第 1 回は 1963 年の年末から翌年の年始にかけて、Mexico City で開かれた。John McCarthy を始め、Marvin Minsky や Robert Yates など錚々たるメンバによる集まりであった。

ILC と正式に銘打った会議はその後しばらく記録から姿を消すが、ALU (Association of Lisp Users) が主催母胎となって、2002 年の San Francisco 大会を皮切りに、2003 New York, 2005 Stanford, 2007 Cambridge UK, 2009 Cambridge Massachusetts, 2010 Reno Nevada と、継続的に催されるようになった。ALU は Symbolics Lisp User's Group を起源として 1991 年に結成された非営利団体で、日本からは青山学院大学の井田昌之先生も発起人に加わっておられる。筆者は 2004 年以来、この ALU Board Member として末席を汚している。

ちなみに、1980 年に、米 Stanford で開催された LISP Conference なるものがあり、これは Conference on LISP and Functional Programming と名前を変えて、90 年代半ばまで続くが、ILC とは別個のものである。

京都開催

日本での ILC 開催は、2010 年暮れ頃に ALU 内での合意がとれたと記憶する。

開催地の候補として、主に東京か京都かで意見交換がなされたが、海外からの参加者にとって魅力的な地名であること、また、Common Lisp 最初の実装が KCL (Kyoto Common Lisp) であったことから、Lisper には馴染みが深いはずだということで、結局京都に決まった。

開催日は、時代祭りを挟む 10 月下旬とした。PC

Chair は京都大学の奥乃博先生にお引受けいただいた。会議場は費用対効果を最優先し、みやこめっせとした。

論文募集

ILC は数ある Lisp イベントの中でも、査読プロセスを持つという点において、(筆者の知る限り) 唯一のものである。とはいえ、査読プロセスはそれほど厳しいものではない。また、集まる論文数も例年およそ 40 ほどのごんまりとした会議である。

査読には EasyChair (<http://www.easychair.org/>) を利用した。今回全部で 25 の投稿があり、そのうち、lightning talk が 4, tutorial が 5, 棄権が 2, そして、残る 14 が査読にかけられ、採択が 11 で不採択が 3 であった。

今回は、いつもよりも投稿数が少なかったこともあり、採択論文と不採択論文を、それぞれ、technical session と software demonstration session に割り当てて、棄権の 2 を除く全員に発表をお願いした。

招待講演

招待講演には、日本の Lisp guru として名高い、和田英一先生と竹内郁雄先生に加え、Lisp in Small Pieces の著者として知られる、Christian Queindec 氏、NovaSparks 社の Marc Battyani 氏にお話だけだ。

和田先生ご持参の PDP-8 Lisp 紙テープと竹内先生の Tarai 関数を使った音楽実演は特に印象深かった。Queindec 氏の取り上げた HOP 言語は、非常に実的な方向性を示すもので、氏の著書内容から理論派のイメージを勝手に作り上げていた筆者は、意外な感を持った。Battyani 氏からは、FPGA (Field-Programmable Gate Array) の構成記述に Lisp を用いて、特定用途のための実時間高性能計算を効率よく実現するという、迫力ある事例を聞くことができた。

Lightning Talks

初日のチュートリアル裏番組として、kyoto.lisp と呼ばれるローカル Lisp コミュニティを中心とした、lightning talk セッションを設けた。このセッションのみ、日本語を OK としたためか、皆伸び伸びしていた。海外からの数人も興味深く聞いていたのが印象的であった。その中の 1 人と後で話す機会があったので尋ねると、「日本語は分からないがスライドを見ていれば雰囲気は分かる」とのことであった。本当だろうか？

最終日には、あらかじめ投稿のあったものに加えて、飛び入りの lightning talk セッションを設けた。楽しい発表が多く、日本からの発表も負けていなかった。両手に余る自作 Lisp 処理系の数々を紹介したり、竹内関数の音楽実演を、早速自作の Lisp 処理系で再演したりと、



会議の様子



晩餐会の様子：一番手前は ALU (Association of Lisp Users) の President, Ernst van Waning 氏

このとき会場が一番沸いたかもしれない。

Lisp Machine 展示

Exhibition では、北陸先端科学技術大学院大学ほかの皆さまのご協力で、Lisp Machine を展示することができた。展示したのは、ELIS, Fuji-Xerox 1121AWS, Symbolics 3620 である。年若い Lisper が、「これが本物の Meta Key か！」と感動していたのが、今なお記憶に鮮明である。

晩餐会

この手の集まりで楽しく有益なのは、会議の引けた後に交わされる、自由なディスカッションであろう。そのままなだれこむ夜の集いはもっと楽しい。最終日の前の晩に木屋町のワインバーで晩餐会を行ったのだが、実はこのほかにも毎晩晩餐会をやっていたようなものである。海外の参加者に比べ、元気の点でどうしても見劣りする日本の Lisper たちが、こういった交わりを通し、刺激され、鼓舞されて、やる気になっていく姿を見ることができたのは、とてもうれしいことであった。

会議運営

世界的経済不況と円高は、会議運営を非常に苦しいものにした。数字となって現れたのは、論文数、参加

者数の落ち込みである。Stanford で、大勢の人を集めた ILC2005 に比べて、両者ともに 1/3 程度であった。

国内からの参加者の少ないことにもがっかりした。ローカルなイベントでは気を吐くわりに、いざ国際会議となると、とたんに尻込みしてしまう、というのでなければよいのだがと心配する。逆に、海外からは、この円高で、よくあれだけ来てくれたな、といった印象である。個人的な寄付も随分いただいた。これは本当に助かった。

参加者の内訳は、日本:37, アメリカ:12, フランス:2, イギリス:1, オランダ:1, イタリア:1, デンマーク:1, トルコ:1, スウェーデン:1, ドイツ:1, であった。

大勢の参加者を募れなかったのは残念であったが、人数が少ない分、熱心な仲間だけで集まったのも事実で、それだけ内容の濃い議論を交すことができたと思う。

結び

色々と至らない点が多かった今回の ILC であるが、散会の際に和田先生から「楽しかった」とのお言葉をいただけて、ほっと胸を撫で降ろした。

参考 URL

1) <http://www.international-lisp-conference.org/2012/>

(黒田寿男 / (株) 数理システム 知識工学部)